

●永久睦子さんインタビュー (2022年3月)

勇気と希望を失わず精一杯生きること・叫ぶこと

語り手 永久睦子（ながひさ・むつこ）さん

1940年生まれ。人間がやさしさをはぎとられてきている。本来人間はやさしい。そのやさしさを共有できるよう希望をもって語り続けていきたい。今日、西尾さんの真摯な質問と出会って、改めてそう思った。

聞き手 西尾慧吾（にしお・けいご）さん

1998年生まれ。これまでに豊かな運動があり、学びたいことがたくさんある。沖縄基地の遺骨土砂問題に関わり、こんなに理不尽なことへの怒りがなぜ共有されないのか絶望的にもなる。永久さんのお話を聞いて、まだできることがあると思った。

永久 こんな若い人とな、本質に触れるような話をしたことがない。

西尾 今回の特集は、住民自治とか住民運動の話を世代間でどういうふうに継いでいくのか、っていう企画をやろうという話になりまして、その中の一つがこのインタビューです。これまで住民運動をされてきた先輩にインタビューして、これまでやってきた取り組みのことであるとかそれに対する総括、これからの世代に対する要望であるとか、現在の日本の状況をどのように見ておられるか、率直にご意見を伺えたらと思っております。まずは今まで関わってこられて、できたこと、できなかったこと、こういうふうにやっておけばよかったなと思うことを整理して伺えたらうれしいです。

●私の原点にある、差別への怒り

永久 昨日か一昨日、あなたから質問の箇条書きをもらったやろ。そんなに整理して聞かれたら、えー！ そんなことなら私が聞きたいわ～と言いたかったわ。

話がそこへ行く前に、私の生まれ育ちみたいなのをちょっと前置きしといた方がええんじゃないかと思う。

なんせ敗戦が5歳。昼の高校へは行かれへんかってん。定時制高校に行って、ずっと貧乏を経験してきたからか、痛みを持つ人の側に本能的に立ってきたなあ。初めて働いたのは農協。リヤカーを押してる横を、制服を着て自転車で爽やか〜に通るぬけていく同級生とかを見てな、嫌でたまらんかった。次は三洋電機のテレビ工場。そこにもまた高校生が見学に来るんや。こっちはコンベアの前で必死やのに、涼しい顔して後ろから見られて、くっそう！ と思ったで。そして18歳で四條畷市役所に入った。ここでも理不尽なことがいっぱいあってな、じっとしてられへん気がしてて、たまたま組合の掲示板に「労働学校」のポスターを見て応募した。これが人生の一つの転機やったかもしれんなあ。その後、しばらくして組合の役員をやり始めた。晩熟ですわ。はじめに婦人部（後に女性部）を立ち

上げて、母性の権利を大幅に改善させた。そして次は賃金問題。自治労（全日本自治団体労働組合）が統一闘争として取り組んだ「差別賃金撤廃」の闘いや。現業職（学校・園務員、給食調理員、公用車の運転手など、公権力に直接関わらない仕事をする公務員）と非現業職（事務職や技術職など）の間にはドーンと厚い差別の壁があって、非現業には係長、課長、部長…というように役職により賃金のランク付けがあった。そこでまず、現業差別賃金表を撤廃して、賃金表を一本化した。次に職務職階の賃金制度については、改善へ大きく道筋をつけた。ここまでは統一闘争、「団結がんばろう」で勝ち取った。

ところが次は難題の「在職者調整」や。制度上の差別は取っ払ったけど、在職者間に、長い年月の中で生じた格差があるのではないかという漠然とした不平等感が組合員の中にあってな。でも組合の闘いはそこまで行き届いてなかった。そこで実態を調べることにしたんや。まず、現行の賃金制度の下で高卒・大卒でストレートで役所に入って1年1回昇給した場合の基本ラインを引いた。その表の上に組合員一人ひとり、賃金月額を縦軸に、年齢を横軸にした分布図に落とし込んでみた。すると基本ラインより下に位置する人があまりにも多いやないか。その多くは、中途採用者、現業、女性で、在職年数が長い人ほど格差が大きいことがわかった。これは差別的意図をもったの作為や！ と、むらむらっときたわ。そうか、これが差別や。小学校の時、先生が勉強嫌いな子をものすごく見下して「お地藏さんのまねしてそこに座っとけ」と、みんなの笑いものにしたり、「授業時間中ず〜と立っとれ」とか。私は「何をすんねん、早う、席に戻したれ！」と、いつも腹が立ってた。

そこで、組合員一人ひとりの「格差」を計算するために、賃金カードをつくり、自分で記入してもらうことにした。先ず、職歴をきっちり書く、履歴書に書かなかった職歴も書く。家の商売を手伝っていたり、農業をしていたり、職を転々としていて恥ずかしいから履歴書には書かなかった職歴も書くことを徹底して、場合によっては聞き取りをして正確を期した。ここでは組合員との信頼関係が求められたよ。これを基に、現行の職歴加算制度に則って初任給を計算し、そこから勤続年数分を昇給して「今あるべき賃金」を算出した。

根気の要る仕事やった。この時、子どもは2人とも保育所やった。寝かしつけてから、とか、会議の待ち時間などに寸暇を惜しんでやったなあ。しんどいと思った時は、賃金カードと向き合ってその組合員の顔を思い浮かべてたわ。みな正直で黙って仕事する人やったわ。

こうして、当局・人事担当に実態を示して、交渉というより説得した。壁は厚かった。あたりまえやわなあ。小さい貧乏市の原資のことを考えたら。でも、だからと言ってその市の職員の賃金が低く抑えられたり、女性や現業職への差別が許されるものではない。交渉テーブルに就いた人事担当者の努力もあったと思うが、ついに80%を年次計画で是正することになった。うれしかったなあ。是正額が最高の人は4万数千円。なんとその人は、私が小学校時代から学校校務員として働いてはって、みんな自分の子どもみたいに可愛がってくれた人や。

闘いを終えた報告会で、私は「差別」について、怒りをこめて語った。「黙ってたアカンねん。声を上げなアカンねん」「四條畷は、差別を絶対許さへんで。これからも」と強調した。集会を終えて、

是正額最高だったその女性が「ありがとう、ありがとう」って泣きはってな。「ありがとうと違うねん」と言いながら私も泣きそうになったわ。

●「臨調行革」に抗って——市民と共に保育、給食を語る

永久 それから、保育所の合理化反対闘争。1980年2月保育所に13項目合理化提案が出て、住民の側に立った地方自治をするということで真っ向から対立して、9か月闘った。臨調行革（1981年「第二次臨時行政調査会」）。土光という経済界のおっさんがな、旗振りをして、公立でやっているあらゆる無駄なことを排して下請けしていけという大きな攻撃の流れがあつて。保育所合理化はその先取りやったんや。四條畷の保育所はこれまでの闘いで保母さん（現在は保育士）の配置基準が国基準より高く、大阪の中でも高かったわけ。「こんな貧乏な市で保育所にこんなにカネかけてられへん」「保育所合理化は五万市民の声や」ってテーブルの向こうの助役が言い放ったわけよ。こっちはな、『保育所を守れ』というのが五万市民の声や」と言うてみせたらうやないかということで闘いは始まった。

しょっちゅう全戸ビラ（全戸にビラを配布）して交渉の状況を市民に知らせたよ。年配らしき男性から「子どもはこの市の宝です。保育所を守るためにしっかりがんばりなさい」というハガキをもらって、みんなで大喜びした。そして署名集めして、保育所ごとに保育集会を開いた。「お母ちゃんもお父ちゃんも子どもも、みな一緒においで」って宣伝した。そこで「なんで保育所が必要なんかな？ ただお母さんが働くためにだけ預かってるんと違うで。一度保育所に来てみて、子どもたちがどんな環境で、『食』を大事にして育ててるのか。近所の人も誘って来てね。保育所の子ども定数を減らしたり、保母さんや調理員を減らしたりしないで、希望する人は、いつでも、誰でも入れるようにしたいのです」と訴えた。そして、「保育所の子どもだけ、カネかけて大事にされてええなあ」という、市民の不公平感をどうしたら取っ払えるやろかと考えて戦術を練った。闘いは9か月に及んだ。合理化は提案されたら、なかなか無傷では終われない。13項目にも及んだ提案だったが、保母の配置基準の項目で大阪の中で、頭一つリードしているところを少し譲って決着した。降ろした団結旗は色あせ、ぼろぼろやった。忘れもせえへんわ。闘争収拾を知らせる市内全戸ビラは、記録的な酷寒の日やった。「みんな、ほんとにようがんばったわ」言うて委員長と抱き合ったわ。

闘いは終えたが、保育運動は続けた。自治労が提起してきた「地域に開かれた保育所」づくりへ、具体的に論議を始め、市と交渉して市の事業としてスタートさせた。定期的に保育所を地域に開放して、保育所の子ども、地域の子も親子連れで参加して、楽しく過ごす事業や。その一環で、夏まつりも賑わった。そして、もう「保育所合理化は五万市民の声や」なんて絶対に言わせへんで、という声があがった。労働者は闘いの中で変わるんやと確信した。

「行革」の流れの中で、保育所の次は学校給食がターゲットになったわ。「学校給食民営化」のお上の声や。今度はこっちが先手を打ったで。「お腹さえ大きくなればいいのでしょうか、学校給食」という大見出しで全戸にビラを配布し、間髪入れずに、給食集会を企画した。精華大学の槌田劭（つちだ

たかし)さんの「赤信号です 子どもの健康」をテーマにした講演と給食の試食会をやることにした(1986年11月16日)。現場のリーダーからの提案で、「ただでなく、今の給食費1食170円でチケット買うてもらおう! チケットの前売りや、戸別訪問しよう」と決まった。しかし、どんな質問や意見が出るかわからへん。そこで予行演習のための学習会を開いた。私が会場を廻り、市民の立場で参加者にマイクを向けた。「もう〜意地悪な市民ねえ」と返って来たりして大笑い的一幕もあった。さあ出発、3人グループを組んだ。一人はちょっと責任のある組合役員、もう一人はその地域に住んでいる組合員、そして調理員。送り出すのにはドキドキした。行革旋風の中で、「学校給食はなぜ公立でないといけなの? 弁当屋さんに大量注文したら安くつくじゃないか」「学校給食調理員は子どもらの長期休みの期間中給料もらって遊んでんのとちがうの?」……という悪宣伝が飛び交っていたが、「自信もって行きや」「直営だからこそできる安全で豊かな給食を作っています」「化学調味料は極力避けて、合成洗剤は使っていません」「学校が休みの時も忙しいです。試し炊き、調理機器の掃除、献立検討委員会」……「なんぼでも言うことあるやろ」「市民とケンカしたらアカンで。わからん質問が来たら『帰って調べてから出直します』言うて一拍おきや」……と。自治労中央や大阪府本部の大会では「地域に打って出る」という勇ましいスローガンはあるが、実践は易くなかったよ。

いよいよ「給食集会」当日。市共闘会議(四條畷市職、水労、四條畷市・交野市清掃施設職員労働組合、四條畷市保険年金徴収員労働組合、パート保母労働組合、臨時職員労働組合)、消防行政研究会(労働組合ではないが、組織化し、市共闘会議に参加)が総動員で準備をしてん。給食作る人、配膳する人、小学校の体育館借りたから運動場で車の整理をする人、……そうして成功したんや。槌田さんの講演の後、心配した試食会も、380人残ってくれて、おじいちゃん、おばあちゃんたちも、「おいしいなあ、孫はいつもこんなおいしいものをいただいてますんやな」と言うてくれはった。そして四條畷市は民営化の提案ができなかった。

行革攻撃に対抗して四條畷市共闘が労働学校を開いて、「私の仕事を語る」をテーマにして各職場から出て報告し、討論し合ったことも功を奏したと思う。やっぱり自治体の労働組合が仕事を通して市民とともに自分らの命と人権、生活のことについて一緒に語ることは大事やと思うねんな。労働者・市民をなめるなよ! ということやんか。これは自治労の地域生活圏闘争、自治研活動と言うねん。四條畷はしっかりその方針を実践したよ。

●そんな闘いがなぜできたのだろうか

西尾 そうした取り組みが、四條畷でそこまで展開できたのはなぜでしょう?

永久 住んでいるところと職場とが近いということが大きいのではないか。大阪役所やったらな奈良からも京都からも通って来てるやんか。そしたら、その土地に対する愛着がない、とまでは言われへんけど、多少薄いかもしれへん。職員のうち半分とまではいかんけど、三分の一ぐらいは四條畷市民やったかなあ。だから全戸ビラなんかすぐにできてしまうやろ、土地勘があるから。さらに担当地域もできるだけ決めていたからね。ビラ入れしてても、地域のおっちゃん、おばちゃんが、「何を配

ってんねん」て、声かけてくれる、そこで会話が生まれるわな。

そんな利点はあった。けど、やっぱり私は、市職員組合の書記長が女性やったことが、自分で言うのもおかしいけど、大きかったのではないかなと思ってる。「お前のとこ、女しかおらんのか」って言われたいう笑い話が残ってるんやけど、国会と一緒に。女性がいないということは政治の目が届かない人が出てくるということ、能力主義的に強者ばかりで労働組合役員を構成していると、臨職で働く人や、しょうがい者の気持ちがわからん。「ちゃんと勉強しとかへんかったから臨職にしか来られへんねやろ」「家の仕事の合間で来てて、承知の上やろ」という発想やねん。それ違うねん。みんなそれぞれ尊厳もって働き、生きてるんや。

ある時、保育所のパート保育さんが「私らパート保育やから、保育のことには口出しでけへん」って、こぼしはってん。すかさず私は言うたで。「なんでやのん、朝夕の子どもの気持ち考えてみ。ものすごく不安で泣く子が多いやろ。その時『〇〇ちゃん、さあおいで』言うて抱きかかえてくれる人やで。“お帰り”の時もそうや。だんだんお友だち少なくなってきた時も不安や。膝に乗せてくれて 1 対 1 で甘えさせてくれる存在やろ。その人が外野でどうすんねん！ 自信もって、保育室の真ん中に座り！」って励ましたわ。

女性は生活者の視点を欠かない。仕事や組合活動と生活を切り離しては考えられない。それが強みや。家のことをほっぽらかして仕事や活動に専念している男性を教育しながら、女性が結局家庭責任を負っているのが現実や。だから女は強いんや。

四條畷市職は、大阪で一番小さい組合やったと思う。「おまえんとは小さいからそんなことできんねん」とか、私が書記長になった時「おまえんとは男おらんのか」と言う人がいた時代やった。おらんかったのよ、女性の書記長は。私もそんなに能力があったわけでもないけど、私がやらなアカンと強く思ったからやったわけよね。最終的には委員長やってんけど。女やからできたというか、発想できたというか、痛みがわかったからだと思う。

臨職もこんな闘いの中で組織化したよ。みんな「国民春闘」とか言うてたとき（1990 年に始まる）。国民春闘ってテレビでしょっちゅう出てたけど、自分らのこと決まったら旗降ろす組合が多いんや。それはダメや。住民の側に立たなアカンし、臨職の人が同じ仕事をして低い賃金やんか。これを上げんうちに、自分らの賃金決まったから、これでおしまいというのはアカンで言うた。

そのうちに、臨職の賃金交渉を先にするようになった。賃金もそうやし労働条件もね。社会保険にも加入させろ言うて。あれは事業主も負担しないといけないからな、なかなか抵抗あったけど、それも実現したし。正職組合員と同じとまではいかんかったけど、休暇も保障させた。子どもにうつる病気のときにはパート保育さんは休んでくれと言われたけど、休んだら賃金もなくなるやんか。休んでくれ言うのなら賃金を補償するのは当然やないかとかね、他市に先駆けて改善していったよ。

●マジョリティが変わるには？

西尾 差別の問題は最終的には力の強い側がどういう態度をとるかという話やと思うんですね。

たぶん現在も差別が続いているのは力の強い側がそれを自覚しないからやと思うんです。抑えつけとけばOKとするマジョリティの側にどう当事者意識を持ってもらうか、彼らが最初から変わってればいいわけなんですけれども、そういうふうに促していくためにはどういう戦略をとられてきたか。

永久 それは叫ぶしかないやん、差別されている側が。足を踏まれた側が『『痛いやないか！』って言わんとわからへんねんで、言わなアカンで』言うて、だんだんわかるようになったんや。おかしいやろ！ 最初からパートで望んで入ったんか？ いろいろあって、夫が一番の稼ぎ手で、その扶養家族から抜かれるようなことのない程度の賃金でええわって思わされてきたんやろ。そんなもん賃上げして、堂々とその扶養家族から抜けよう！ って。そこからやでって言うた。私はやっぱりね、叫ばないと思う。「闘いのないところに変革はない」。

差別する側に教育はせなあかんけど、そんなもん言葉で教育したって直らんわ。どつかれたらどつき返すみたい。やられたら痛い。「お前のしてることは俺をどんだけ傷つけてんのかわかるんか！」って言うんや。学校の校務員さんなんかは「こづかいさん」と呼ばれた時代があっせん。女は男の半分の賃金でええ、とかな平気で言うたってんやん、管理職が。「何言うてんねん、違うやろ」という自尊心と権利意識。「ああ、そうか」と気付かせなあかんねんな。

私をこう言わせるのは、その生い立ちや女性であること、しょうがい者と出会ったこと、などなどや。私は、誰に教えられるのでもなく、弱い人の、悲しい人の、貧しい人の側に立つのがもう体に沁み込んでるんやと思うねんな。

●市役所は人権と平和のトリデ

永久 「自治体は人権と平和のトリデ」というのは沖縄県・読谷村の元村長山内徳信さんから聞いた言葉や。沖縄の平和行進に参加した時、村長室に毛筆の憲法9条と99条を見たのよ。四條畷に帰って「市役所に憲法9条と99条を」と要求して、長いやり取りを経て、市役所玄関に設置されたの。そのほか、市の広報版に「自衛隊員募集」のポスターを貼らせないことや、市役所に日の丸を揚げない（祝日も）などを実現してきた。その際には、朝鮮人や沖縄出身の市民の気持ちを考えようと、説得したよ。こんな要求の時は穏やかにわかってくれるまで話し合ったからね。

昭和天皇の大葬の礼の日も、保育所や図書館・・・をいつも通りオープンし、開けた施設の玄関に立て看板をしてん。「天皇陛下が亡くなって喪に服するということでみんな閉まってるけど、市民に直接関係するところだけでも最低開けました」て。「なんでそんなことするかっていうと、一人の人間が死んだんやから、それだけの重みはあるやろうけども、これほどまでに喪に服することを強制されるのは変ではないでしょうか」「戦争の時に天皇陛下の名のもとに、私らの自由と幸せを奪われた時のようなにおいがしてきます」と。「国から言われたからではなく、直接子どもに関わることか、市民に直接関係するところはオープンにしましたので通常通りご利用ください」って書いた立て看板を掲げてん。その日は飲み屋さんからパチンコ屋までみんな国の命令に従ってお休みだったけどね。立て看板を見た高校生が、「ありがとうございます。その考えに敬意を表します」というメモを残してくれてう

れしかったわあ。大葬の礼の時は右翼の脅しの電話があったけど、来よれへんかったわ。

●部落、しょうがい者、朝鮮と出会い、価値観・歴史観・世界観が問われた

永久 基本組織の「部落解放大東・四條畷地域共闘」は早くからあったけど、四條畷・大東・寝屋川の女性の「地域共闘・北河内婦人解放連絡会（後に女性解放連絡会）」を作ってね（1978 年 12 月）、そこでいろんな活動をしてきて、出会いができたのよ。

この「女性共闘」で、まずお互いを知り合おうということで、会議や集会の後、飲み会をやったりして気心が知れてきて、お互いに悲しかったこと、つらかったこと、くやしかったことを語り合った。被差別部落出身の女性の話には心打たれたなあ。先ほど私の生い立ちのところで、自分の悲しみや怒りなどを話したけど、なんや私の苦労なんて序の口やなあと思った。そして毎年参加してきた部落解放全国女性集会での感動も深くなった。

次の出会いは しょうがい者やった。寝たきりの車椅子生活で、食事、排泄、風呂、もちろん外出も、生活の全てに介護を要する森修さんと、その介護の青年・学生と出会った。1981 年、国際しょうがい者年の年明けに生駒山中でしょうがい者とお母さんの無理心中事件が起きてな、彼は「僕の住む街でこんなことが起こってしまって、僕は何をしてきたんやろ」と嘆き、四條畷市職員組合の扉をたたいた。こんなに重度のしょうがい者と話をしたのは初めてで、緊張した。けど「ここで向き合わなかったら、四條畷市職の名が廃る」と、肩ひじを張っていた。まず言葉が聞き取れない。介護者は通訳しない。当たり前やわな。私がしょうがい者やったら、「この人何言うておられるのですか？」なんて言われたらものすごく屈辱的やろうなあと実感したわ。目を見て、耳を澄まして、何度も聞き返したよ。そしてやっと本題に入った。「国民春闘ってなんですか？ 組合員の要求が通ったら旗を降ろしますか。僕のこと要求に入れてくれませんか。僕も、生まれたこの四條畷市で、あたりまえに生きたいのです」ということやった。そして後日、私は彼の家を訪ねた。両方とも前回より肩の力が抜けてはいたけど、組織として、この人を裏切ってはならないと決意した。そして、地域の労働組合や女性組織、部落解放同盟などに呼びかけて、しょうがい者解放共闘のようなものを作ろうと約束、その年に「しょうがい者解放四條畷・大東市民会議」を結成して、森さんが議長、私が事務局長に就いたんよ。

そして行政交渉を始めた。「しょうがい者の 24 時間の生活を保障してくれ」ってな。そんなん一足飛びにはいかんやろ。そこで一步一步、しょうがい者と「健全者」がともに集まる地域の拠点の場や農園などを実現した。そこで野菜作りやもちつきなどもした。しょうがい児やその親御さんと付き合うてな、わかり合うまで大変やった。もともと信用されてへんもん。ずっと差別してきたヤツらが何を偉そうなこと言うてんねんってな。それが長屋の一軒の「解放の家」を獲得して、しょうがい者と健全者が交わり始めた。最初は迷惑かけまくったよ。平気で自分の家みたいにあがって行って、冷蔵庫開けてしまうわな、トラブルあったけど、地域の人が許容してくれるようになって、「また来てるわ」という感じで。それから、みんなで農園も借りてな、おじいちゃんたちが農作業を手取り足取りし

て教えてくれたりして、また関係が深まった。そこには地域のしょうがい者の介護をしてる学生・青年がいてくれたことが大きかったと思う。それはそれは優しい青年たちやった。私も彼（女）たちと助け、助けられたよ。そんなことを周りに話したら「四條畷だけ別の風が吹いてんのと違うか」と言う人もあったけど、「別の風が吹いてるのと違う、その風を変えてきたんじゃ」と思ったけどね。

「市民会議」の議長と事務局長の間にも葛藤があり、ケンカもしたけどな、活動を重ねていくうちに友だちになったわ。ある日、原稿書きに詰まって「アカンわ、書かれへん」と苦悩する私に、「そんなこと言わんといて、あんたにそんなこと言われたらオレはどうなるん？」と一言。その顔は優しかった。同志的というのかなあ。「能力主義はアカンで」というあの時の彼の「一喝」を私は今も忘れられへん。後で聞いたんやけど、「永久さんと出会ってオレの健全者観が変わったわ」って言うてたんやって。

次は、在日韓国・朝鮮人との出会い。これは強烈やった。私の歴史観、世界観を点検することになった。

四條畷の韓国問題との出会いは、映画「オモニー怒りは燃える」の上映運動から始まった。1970年11月13日、韓国の軍事独裁政権下で非人間的な労働を強いられた労働者、チョン・テイリ氏が「われわれは機械ではない、労働基準法を守れ！」と叫んで焼身決起し、韓国の労働運動に火をつける。息子の遺志を継いで立ち上がったオモニの姿が描かれたこの映画は日本全国に上映運動が広がった。そして1980・5・18光州蜂起。平和な光州市に2万人の戒厳軍が襲いかかり、2000人の市民を虐殺する。そして7年、労働者・市民は戦列を立て直し、87民衆抗争で、軍事独裁政権を退陣させた。その後一進一退を繰り返し、2017年キャンドルデモで政権交代を実現。第3回南北首脳会談を成功させた。そして2022年、大統領選はその結果が危ぶまれているという。それでも、この日本で、祖国の民主化と統一を求めて日本の私たちを連帯の相手として闘ってきた韓国人・韓統連（在日韓国民民主統一連合）は「選挙には勝っても負けても、闘い続けるのみです。自主、民主、統一の闘いには必ず勝利しますから」と言う。凄いなあ。どうしたらこの精神が培われるんやろうと思うね。こんな人とつきあいながら日朝、日韓連帯運動を続けて来たんよ。

また機会があったら話したいと思うけど、毎年8・15に訪韓してるねん。元気が出るなあ。「私たちががんばれるかも知れへん」と思える。朝鮮民主主義人民共和国にも何度か訪問したよ。初訪朝は1986年の秋、翌年が1987韓国民衆抗争やったからね。「朝鮮はひとつ」を実感した。ひとつの朝鮮を引き裂いている軍事境界線ね。北側にも南側にも立ったよ。春うららかな日に、展望台に立ったらイムジン河の向こうに人の姿が見える。今度は酷寒の日、川は凍って、空気も凍って、もやに遮られて何も見えなかった。肉親を、恋人を南北に引き裂かれた人たちはここで何を思うんだろうかと、立ちすくんでしまったわ。

「恨（ハン）」という言葉あるやろ？ その深い意味を、在日韓国人から自身の体験を通して聞いたときね、知っていたつもりの歴史が軽くて、浅いことを思った。知っているということとそれを自分のものにするという事は違うからなあ。そんな出会いを重ねて知識に骨格ができていったわけよ。

西尾 そうした取り組みが四條畷でそこまでできた理由は？

永久 それは、日頃の運動の積み重ねかな？ それと反差別の地域共闘があったこと。でもやっぱり、リーダーの姿勢かも知れん。一生懸命語りつづけたら伝わるという信頼関係かな？ しょうがい者と、日韓で言うと、相手のアプローチが大きかったと思う。本気で体当たりして来られたから、こっちも本気になったわ。

●そんな闘いがなぜ引き継いでいないのか？ —私らの「個」の確立の弱さ

西尾 積極的に学ぶものが多いのにもかかわらず、何で引き継げてへんねん、っていうのはあるんですね。ここまでやってきてくださったことがどうして今こんなに消えているのか不思議で。

永久 どうしてやと思う？ あんたの目から見て。ごめんな、私、あんたって言うねんやんか。

西尾 いえいえ大丈夫です。うちの母親もそうですし、関西出身なんで大丈夫です。

一般的には、労働組合やったら高度経済成長があったから、平和運動やったら労働運動が賃金闘争だけやってりゃOKになったからとか。社共対立がなんとかとか。高度経済成長が終わった後は、要は労使が協調する路線に入る。まともに対立するのではなく労使協調ではないですけど、労使で仲良くやった方が賃金がもらえるからそれでええんやみたいになって、だんだん、だんだん組合運動が壊れていったとかですね。経済的に儲かればOKっていう人が増えたからとか。いろいろいわゆる一般的な説明はあると思うんですけども。

永久 こういう質問をして、すば一っと答えが返って来た人おる？ あなたが先輩か誰かに聞いて。

西尾 あまりないんですね。ただいつも思うのは、人口がどうこう、当時の経済状態がどうこうとか。それに対抗してもうちちょい何かできなかったんかなとは思んですけど。正直負けて仕方がなかったんや、尻すぼみになったんやとか。それ以上のことは言えへんもんなんかなあと。下の世代の勝手な感覚ですけど、もっともっと理念として闘い続けることであるとか、人権の思想はすでに生まれてたのに、なんでその勘所がつぶされてしまうのかわからない。

永久 ごめん、年齢的に「大先輩」から若いあなたに聞くのはないわな。こっちも答えに困ってんねん。それな、辛いけど、やっぱり一人ひとりが個を確立して、自立していなかったということやないか。要は何を軸に団結してきたかが問われてると思う。労働組合で言うたら、カネと自分が楽をするための労働条件？ それだけか？ って訊き返されて、そうじゃないと、実践を裏付けして答えられるかどうかということではないやろか。言うてみれば、ふわ一っと団結していたのではないか。そんなところへ「大衆消費社会」という大きい波が来て、より豊かに、より楽しく生きようとする風潮が蔓延して、友だちと深く関わろうということも少なくなってきた、そこへ新自由主義の波や。その波にさらわれたというかな。この根本のところを、まずそれぞれが自分に問い、深く討論することが大切やと思う。

それと、自分の責任を抜きにして言うのではないが、総評が解体され、「より幅広く」との掛け声で「連合」をスタートさせたが、「反安保」や「日朝・日韓連帯」「原発」などの課題を引き継げなかつ

た。早くから論議のあった、政党と労働組合の関係でいうと、政党が労働組合に依存してきた体質から抜け出せず、労働組合の弱体化は政党の弱体化につながった。そして今、日本の民主主義と平和が最悪の危機にある時、野党が日本の外交を「日米を基軸に」と語っている。「落ちるところまで落ちた」と言わざるを得ない。この状況を打開するために私たちはどうするのか。歴史を正しく学び、日本の進路を定めなければならない。日本は朝鮮に何をしてきたのか、アメリカは世界で、朝鮮戦争で、そして日本に何をしたのか、私たちは目を覆いたくなる歴史の事実を正視し、謝罪し、謝罪させ、二度と繰り返さない決意をもって変わり合っていかなければならない。歴史を動かすのは市民一人ひとりだと私は思う。

●最後に、希望はある

～ポケットにしまっていた 高校・社会科の先生の言葉～

永久 一人の人間が残した行動と言葉というのはもうずっと生きていくと思う。定時制高校時代の社会科の先生で歴史を一年間習ったんやけど、その人が最後の授業でな、「お前ら一年間俺の話をどう聞いた？」って、いきなりやで。顔色がいつもと違っててん。腹を据えたような気迫というかなあ。たたみこむように、「何が心に残った？」とか、いろいろ言葉を重ねてね。私らが答えるのを待ってくれた。でも誰も答えられなかった。何を言われているのか、わからなかった。そこで最後に、「言ったらう。大仏の開眼が何年やとか、そんなもん5年や10年、100年違ったって、たいした問題じゃないって。だけど俺がお前らに伝えたかったのは、『虐げられた者が虐げる者に対して、闘いを挑んできた歴史』だ」って。

でもその時はまだ言葉の意味がわからなかった。それが、ストーンと胸に落ちたのは、韓国へ行ってデモに参加した時やった。日本とはケタ違いのマイクの音量、デモ隊の数、そして気迫や。あーこのことやったんや。涙があふれてきたで。山口先生の顔が思い浮かんだわ。「命かけて闘った人がおらんじゃ」「農民一揆のことも話したろう、素手で闘った人たちのいたことを。俺は今こんな話をしてるけど、言えない時代が来るんだ。この勤評（1958年）を通したら。だからおれは勤評に反対なんだ」って。九州弁丸出しの言葉が蘇ってくるのよ。教壇の端から端まで歩き回って黒板に書いては消し、消しては書いて動き回って。冬でも額から汗を流してはった。ポケットに入れておいて後からわかる言葉ってあるんや。私も伝えておきたいことがあるなあ。一人ひとりの歴史を紡いでいかなアカンなあ。細い糸、太い糸あるけど。いろいろ絡ませて。

あなたのような人がいるのは希望だと思う。出会ったことがなかった。出会えてよかった。ありがとう。また話し合える時間があるといいなあ。